

# 史跡和歌山城第34次発掘調査 現地説明会資料

平成24年1月28日（土）午後1時30分～3時

和歌山城管理事務所・和歌山市教育委員会

（073-435-1044） （073-435-1194）

和歌山市は史跡和歌山城の保存整備事業を進めています。平成18年には御橋廊下<sup>おはしろうか</sup>の復元整備が完了し、一般公開されています。その後、周辺（二の丸西部）整備のための遺構確認調査を実施してきました。二の丸は藩主が生活し、政治を行ったところで、西部は大奥と呼ばれる男子禁制のエリアに相当します。平成20～22年度には御橋廊下に連なる二の丸北西部<sup>ごきゅうそく</sup>（御休息と呼ばれる藩主がくつろいだ場所）で調査を行い、浅野期（江戸時代初頭）の石垣、徳川期（江戸時代前期～末期）の大奥内部と周囲の通路部を区画する土堀、石組の排水施設、二の丸御殿の坪庭に設けられた池<sup>しつくいけ</sup>（漆喰池）など多くの遺構を検出しました。

本年度の調査地点は平成21年度の調査で漆喰池を検出した坪庭の北側及び東側隣接地にあたり、文政8年（1825）の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」<sup>わかやまにのまるおおくとうじおんゆうしのず</sup>などにみえる二の丸御殿北西部の建物（御休息・御書齋・御清之間）や裏庭、大奥内部と周囲の通路部を区画する土堀の基礎石組の延長部分などの遺構の存在が推定される場所でした。

## 1. 発掘調査の概要

- 遺跡名：史跡和歌山城
- 所在地：和歌山市一番丁3番地内
- 調査主体：和歌山城管理事務所  
調査指導：和歌山市教育委員会 文化振興課  
調査機関：(財)和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班
- 調査期間：平成23年11月17日～ 継続中
- 調査面積：200㎡

## 2. 調査の成果

発掘調査を実施した和歌山城二の丸は、建物などを描いた絵図（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」など）が残されており、その絵図をもとに、ある程度遺構を推定しながら調査を進めることができました。そして、実際に絵図と合致する江戸時代後期の遺構を確認しました。遺構は二の丸御殿の建物の柱を据えたとみられる大小の礎石<sup>そせき</sup>7基、礎石の下部施設である根石<sup>ねいし</sup>4基、縁側から裏庭に降りる階段を据えた台石と踏石、土堀基礎石組、植込石積・景石・水琴窟<sup>すいきんくつ</sup>などの庭園施設、石組暗渠溝<sup>あんきよ</sup>・石組溜枘<sup>ためます</sup>などの排水施設を検出したほか、絵図には描かれていない江戸時代初頭の浅野期石垣の一部を確認しました。

## 【主な検出遺構】

**礎石** 建物の礎石を7基確認しました。石材は全て砂岩の自然石が用いられており、大きいものは直径0.7m～1m、小さいものでは直径40cm程度の規模を測ります。これらの礎石は、絵図にみえる「御休息」、「御書齋」、「御清之間」に立てられた柱の位置に対応するものと考えられます。

**根石** 建物の柱を支える礎石の沈下を防止するための下部施設で、礎石を据える位置に直径60～70cmの穴を掘り20～30cm大

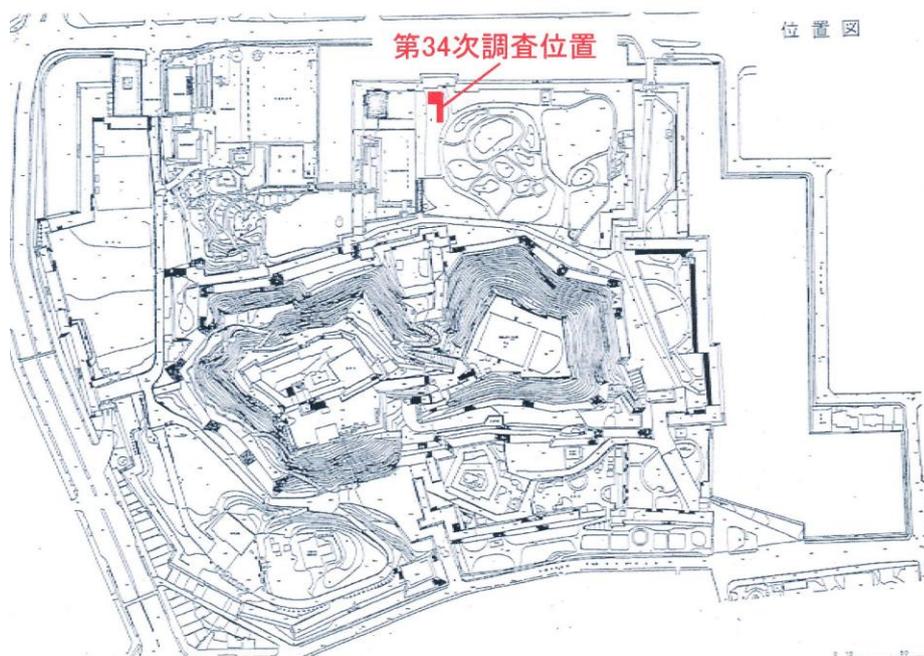
の結晶片岩けっしょうへんがんを敷き詰めたものです。調査区の中央部で4基を確認しました。

**階段台石・踏石** 階段台石は、絵図にみえる「御休息」北側の縁側から裏庭に降りる階段を据えるもので、長さ124cm、幅34cmを測る砂岩の方柱状切石を用いています。台石の両端部には階段を固定したホゾ穴が溝状に彫られています。階段台石のすぐ前には直径58cmの踏石が1基設置されています。踏石の石材は花崗斑岩かこうはんがん（熊野地方の石材）を用いており、今回の調査ではこの1カ所にだけみられました。

**土塀基礎石組** 土塀基礎石組は幅82cm、高さ約15cmの規模で、東西方向に12.9mの範囲を検出しました。石材は砂岩割石を用いて南北面をそれぞれ一列に組み合わせており、外面をノミで削り平坦面に加工しています。北側部分は地下にもう1段分が埋まっており、作られた当初は北側部分の地面が少し低かったとみられます。

**植込石積・景石** 絵図にみられる植込は近代以降の攪乱でほとんど失われていましたが、植込の石積と景石を検出しました。植込石積は土塀基礎石組の南側に幅30cmの間隔を空けて並行して積み重ねられています。結晶片岩の割石を2～3段に積み、北側に面を揃えるもので、最も上の石は南に向かって緩やかに下る傾斜がみられることから、植込は裏庭に向かってスロープ状であったと考えられます。景石は結晶片岩の板石を立てた状態で並ぶ2基を検出しました。大きい方は幅65cm、厚さ25cm、地上高30cmを測ります。

**水琴窟** 深さ約60cmの穴を掘り、高さ26cm、胴径約30cmの陶器製甕を逆さまに埋め込み、甕の底部中央に孔を開け、その上に直径約60cmの皿状に漆喰で水門を設けたもので、皿の内側には玉石を入れていたものとみられ、絵図にみえる「御書齋」北西角の縁側にある手水鉢を置く場所の排水施設に相当するも



史跡和歌山城第34次調査位置図

のと考えられます。この施設は甕の中に落ちる水滴の反響音を楽しむ鑑賞施設でもあり、和歌山城内では初めての検出となります。

**石組暗渠溝・石組溜枡** 石組暗渠溝は「御清之間」北側の地中に東西方向に設置されたもので、5.1mの範囲を確認しました。この溝は平成21年度に検出したものの延長部分に相当し、東の端で石組溜枡につながっています。石組溜枡は幅60cm、深さ80cmを測るもので、これらの排水施設は底面と蓋石は結晶片岩、側面石組は主として砂岩を用いています。

**浅野期石垣** 二の丸西部は江戸時代前期（徳川期）に西堀を埋立て拡張したとされる部分ですが、この拡張前の西堀石垣（浅野期）を平成21・22年度の2回の調査で深さ1.6m、長さ約27m分を確認しました。今回の調査では堀に面した石垣に対して反対側の郭内部に面をもつ石垣を検出しました。

石垣は南北方向の東側に面を持つもので、砂岩と結晶片岩の大きな自然石を野面積みに2段分を布積み（石材の高さを合わせて横方向に積む）しており、間詰石（大きな石の隙間に詰める小さな石）に結晶片岩の割石を用いています。長さ約3m、高さ1.1mの部分が残されていました。この石垣は、堀側の石垣にみられた砂岩の自然石を数個に分割したものや、矢穴跡（石を割るときに楔を入れた穴の跡）、石垣刻印（石材表面にみられる記号）、石垣面をノミ加工で平坦化している部分などがみられないことから、堀側の石垣とは異なる石材の使い方をしていると考えられます。

### 3. まとめ

今回の発掘調査では、和歌山城二の丸御殿に関連する遺構を確認することができました。検出した礎石、根石、階段台石などの遺構は文政8年（1825）の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に描かれた御休息・御書斎・御清之間に関するものとみられ、江戸時代後期の藩主の生活に関わる重要な遺構と考えられます。また江戸時代初頭・浅野期の石垣の一部を確認したことも和歌山城の石垣の変遷を考える上で貴重な調査成果です。

今回の調査成果は、今後、和歌山城二の丸の保存整備を検討していく上で貴重な資料であるといえます。



調査地全景写真（北から）



土塀基礎石組・植込石積（東から）



礎石・階段台石・踏石（北から）



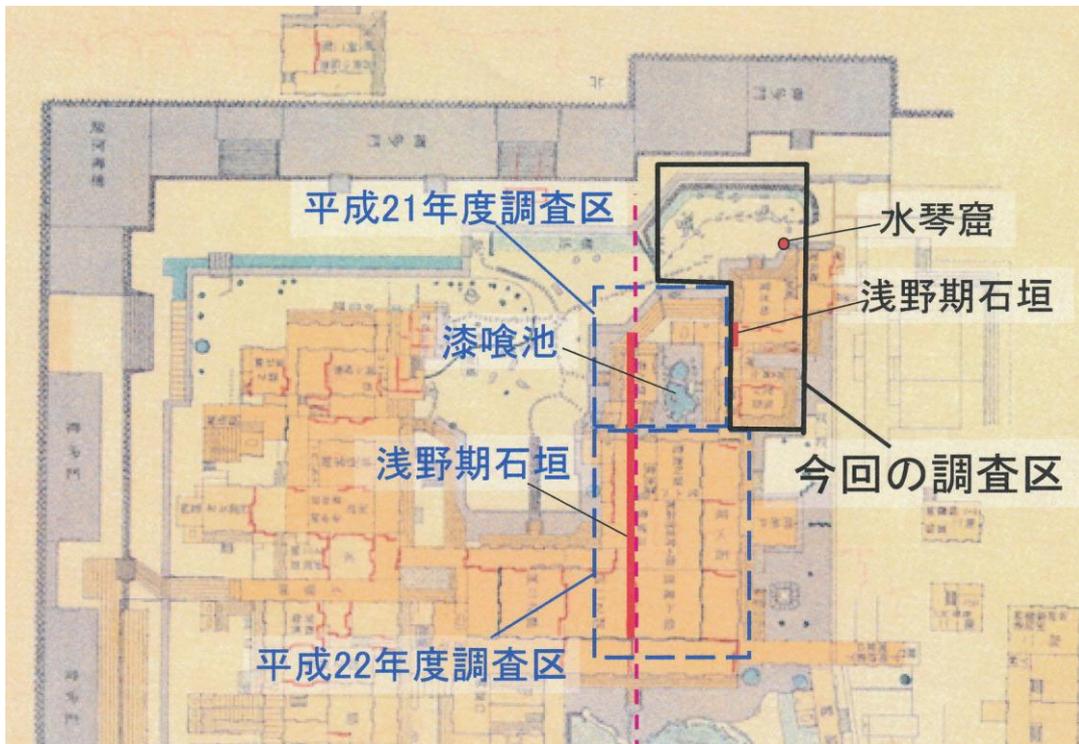
水琴窟（北から）



石組暗渠溝・石組溜枒（東から）



浅野期石垣（東から）



わかやまにのまるおおくとうじおんゆうしのず

史跡和歌山城第34次調査（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に加筆作成）